

もしかして? わたしにも?

～無意識の偏見～
(アンコンシャス・バイアス)

女性・男性の
どっちを想像する?



ふつ。
男性は…



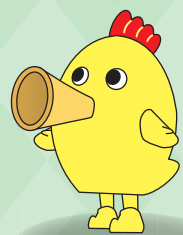
ズータン



当然。
女性は…

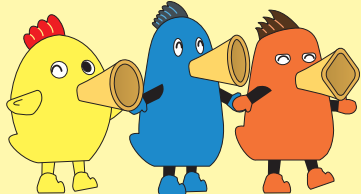


ナビー



キッピー

おおいた市
人権イメージキャラクター
「キズナーズ」



1. 知る ~無意識の偏見(アンコンシャス・バイアス)とは?~

だって、
当然 女性が…。



ナビー



えっ！
でも、
ふつう 男子が…。



ズータン

「見る人によって変わる」

どっちを想像するかは

よね。



キッピー

無意識！
どうして!?
いつの間に!?



って言うんだよ。

無意識の偏見
(アンコンシャス・バイアス)

それを

という認識が
あるんだね。

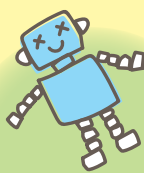
- ・ロボット遊びをするのは男子
- ・赤いランドセルは女の子
- ・家事や育児をするのは女性

なるほど！

ズータンとナビーには



脳が無意識のうちに
自分にとって都合の
いいように解釈する
からなんだ。



感じたり



聞いたり



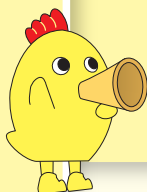
見たり

当然

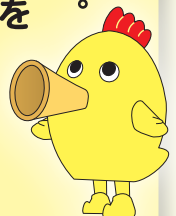
ふつう



無意識の偏見は誰
もが持っている可
能性があるんだ。
でも、それがもた
なって…。



それはね…。
過去の経験を
もとに



脳が
「無意識」に…。
だったら、
仕方がないよね…。



2. 気づく ～無意識の偏見がもたらすものは？～

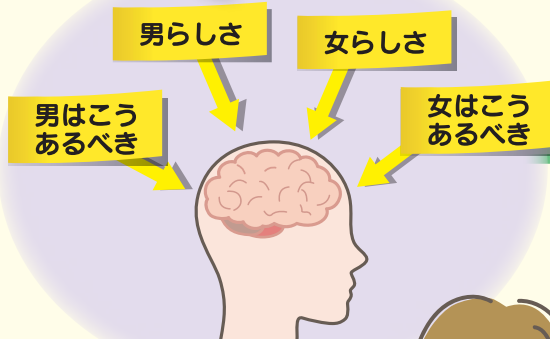
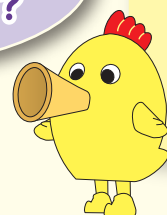
次のシーンを見てみて！

消防士に
なりたい

育児休業を
取ります

もっと女性らしい
仕事にしたら？

男性のあなたが
取らないといけないの？



自分も同じような
ことを言ってしまう
のかも…。でも、
きっと悪気はない
んだよね…。

そっか…。
悪気はなくても、相手を傷つけ
ている可能性があるんだね。
気づいてなかったな…。

そうかもし
れないけど、
二人の顔を
見てごらん。



ほかにも、こんな言葉を聞い
たことはない？

こうれいしゃ
高齢者
なのに…

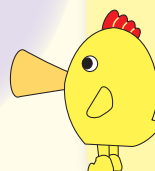
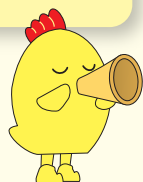
今どきの
若者は…

当然 ふつう
～らしさ ～すべき

ある！ある！
そして「…」に入る言葉の
多くは、相手を傷つけるも
のになるような気がする。

そうなるの

「無意識だから…」
では済まされない
よね。



3. 考える ～差別の根底にあるのは？～

ヘイトスピーチ



「外国人なのに…」

部落差別



「あそこに住んでいる人は…」

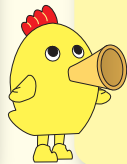
次のシーンを
見てごらんよ。



差別にも、無意識の偏見が関係しているの？



その通り！
生まれや性別など、
本人に「責任がないこと」「選べないこと」を理由にその人を排除したり、傷つけたりする言動は差別だよ。



ひどい！
許せない！
これは偏見に基づいた差別だよ！



外国人なのに…

あそこに住んでいる人は…

差別

ひそひそ…

こそこそ…

うわさ

悪意

あの人たちは…

あの国(地域)は…

不確かな情報

偏見

昔から…

当然

ふつう

～らしさ

～すべき

みんなが…

あそこは…

あの人は…

無意識の偏見

無意識の偏見は強化されたり、新たに刷り込まれたりして、時に言動として現れるんだね。
だから、自分の中にある無意識の偏見に向き合うことが必要なんだ！

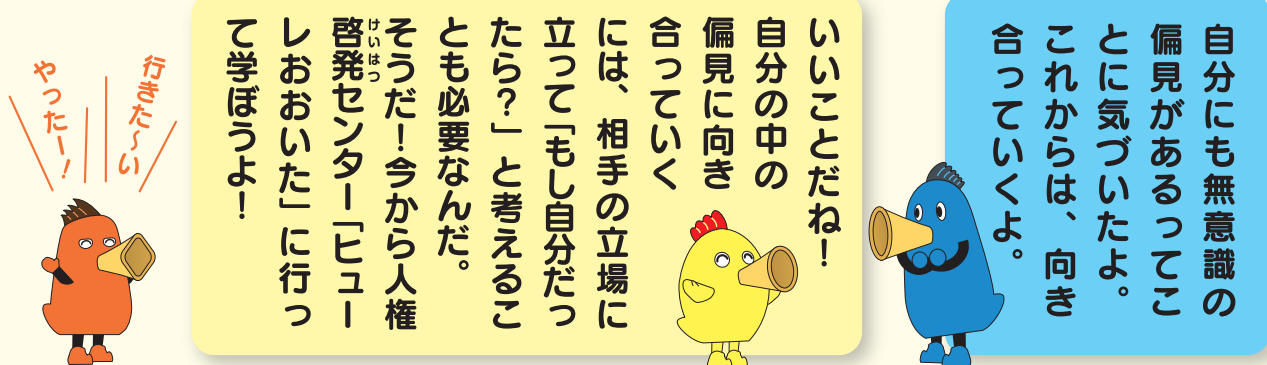
無意識の偏見がこんな風に、差別につながることもあるんだ。

じゃあ、どうしたらいいの？

なるほど！



4. 見つめなおす ～差別をなくすためには？～



5. 広げる ～確かな学びを積み重ねて～

高齢者疑似体験



車いす体験



やってみると大変さがよく分かりました。



妊婦疑似体験

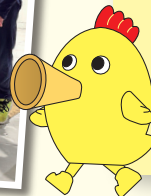
アイマスク体験



段差や坂を乗り越えるのは大変でした。

ヒューレおおいたは、J:COM ホルトホール大分 1階にあるよ！

「ヒューレおおいた」では、様々な体験活動ができるんだ！



体験を通して「相手の立場に立って接したい」という気持ちが強くなってきたぞ。



その気持ちが「差別をなくす」という行動へとつながっていくんだね。

こんな記事もあったよ！



「女将の思い」

群馬県にある伊香保温泉での話である。1990年代のことだ。一軒の旅館で、大浴場にいた宿泊客が怒声をあげ、苦情を訴えていた。障害者の客が浴場を汚したからだ。すみません、すみません。女将（おかみ）だった松本和子（ともこ）さん（80）は何度も頭を下げて、謝った。

それでも客の怒りは収まらなかった。ついには障害者の宿泊が悪いかのようなことも口にした。女将はたまりかねて言った。「お客さんが別の旅館に行ってもえませんか。この人たちは、うちにしか来られないんですよ」

確かに当時、車イス用の設備を整え、障害者を積極的に受け入れている宿は少なかった。そばにいた娘の由紀（ゆき）さん（54）は思った。乱暴な言い方だけど、母親は間違っていない。「あつぱれ。うちはそういう旅館なんだ」

それから20年以上が過ぎ、旅館の女将はいま、由紀さんが継いでいる。彼女が目指すのは、徹底して「旅行弱者」に寄り添う旅館だ。障害者や幼児を連れた家族客が、安心して過ごせる宿を理想とする。そのバリアフリーなどの試みが地元で注目されている。

先代女将の和子さんに尋ねてみた。なぜ、あのとき、あんなことを言ったのですか。和子さんは言いよどんでいたが、やがてポツリと言った。中学のとき、小見まひの仲良しの友だちがいたこと。その子が悲しい思いをしていたこと。

「でもね、そういう世の中じゃいけないと思ったんですよ。和子さんは穏やかに語った。窓の外では上州の連山が悠々たる姿を見せていた。

【朝日新聞 2023.12.9
「天声人語」より】

「無意識の偏見」に気づき・向き合うことが、差別をなくすことにつながっていきます。

ちょっと立ち止まって、自分の中の「当然」「ふつう」を見つめなおしてみませんか？



豊かな心を育む人権・同和教育